



武中の風

校訓

「自主」「協同」「永続」「健康」

学校便り令和7年12月号

鹿児島市立武中学校

令和7年が終わる

校長 坂中 裕一

師走に入り、時の経つのが早いと感じる。寒さも一段と厳しくなり、マフラーを巻いて登校する生徒も増えてきた。令和7年を振り返ると、年金制度改正法の成立、日本初の女性首相の誕生、青森県東沖地震、5年に1度の国勢調査、大阪万博など、発展と不安の入り交じった年であったように思う。また、県外に赴いた際、コンビニで働く外国人労働者や無人レジの普及を見ることにより、社会が急速に変化していることを実感する。

さて、令和7年の武中学校はどうだったか。一番は兄弟校盟約50周年記念式典が本校で行われ、全校生徒で鶴岡第二中学校の一行24人をお迎えしたことだろう。授業に一生懸命取り組む姿、部活動の練習や試合に必死に励む姿、学校行事の盛り上がり。このような生徒たちの真っ直ぐな学校生活は、生徒たち自身の自覚の表れだと思う。一方で、困り感を抱えている生徒もいた。努めて早期の対応を心がけ、生徒に寄り添い、継続して関わり、そして、生徒も職員も我慢強く過ごしてきた。

私の1年を振り返ると、附属中学校から武中学校の舵取りを任せられ、現在も試行錯誤の真っ最中である。「教育は流水に文字を書くが如し」という哲学者の森信三のことばがあるが正しく実感している。しかしながら、達成感もあった。二学期になって始めた根性坂と正門の清掃であるが、最初に誰が私に追随してくれるかと思いを馳せながら毎日を過ごした。ある日正門前に集めておいた落ち葉が残らず処分されていた。生徒会役員と生徒会の顧問であった。長い期間、言葉に出さず、待ち続けた結果であっただけに嬉しかった。世話をしただけ美しく咲く花と異なり、人を育てる上で、注いだ愛情が期待した所作となって直ちに返ってくるとは限らない。「待つ」ことは大切である。そして、私たち職員と保護者の方々は、それぞれが学校教育と家庭教育を日々試行錯誤しながら取り組んでいる。学校と家庭とが連携し、相互理解を図りながら子どもの育ちを見守ることも改めて大切だと思う。

来年は丙午（ひのえうま）。60年に1度の干支である。午年は明るく活発でエネルギッシュ、行動力と決断力に優れ、チャンスをつかみやすいパワフルな年とされている。武中学校の生徒のためにあるような年ではないだろうか。しかも、60年に1度の年である。令和8年は武中学校にとって、一大飛躍の年にしたい。



送迎時のお願い

体調不良や怪我により生徒を送迎される際の際のお願いです。これまで安心・安全メールでお願いしましたが、①横断歩道付近 ②停止線前 ③ゴミステーション前 での停車は近隣住民へのご迷惑や事故防止のためにご遠慮ください。①の横断歩道付近の停車は、生徒を横断歩道に誘導する際に対向車を十分に確認できません。②の停止線前の停車は①の横断歩道付近と同様、これまで寸前で衝突を回避した事例がいくつかありました。③はゴミステーションを利用される近隣住民への配慮です。なお、依然として、私有地での車両の転回があると学校に電話が寄せられます。徒歩で通学する生徒や車両に同乗している生徒の事故を未然に防ぐために、そして、近隣住民へご迷惑とならぬよう何卒よろしくお願いいたします。

